

ひとり暮らし後期高齢者における IADL の自立と遂行

古谷野 亘¹⁾, 澤岡 詩野²⁾, 本田 亜起子³⁾

1) 聖学院大学, 2) 公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団, 3) 元・神奈川県立保健福祉大学

第 53 回日本老年社会科学大会一般報告, 2011.6.

【目的】 都市のひとり暮らし後期高齢者における手段的日常生活動作 (IADL) の遂行の可否と遂行者について観察することを目的とした。

【方法】 調査は、2008 年 8~9 月に東京都杉並区内に居住するひとり暮らし後期高齢者 1,503 人を対象として、同区により実施された。本研究においては、個人情報削除したかたちで同区から提供されたデータを分析した。調査対象者の選定は住民基本台帳からの無作為抽出によって行い、地域包括支援センターの専門職が対象者宅を訪問した。調査対象者のうち実際のひとり暮らしは 783 人で、うち 440 人 (56.2%) から回答を得た。

回答者の 83.2% (366 人) が女性で、平均年齢は女性で 81.4 歳、男性では 82.0 歳であった。要介護・要支援認定を受けている人は、女性で 29.7%、男性では 21.6%であった。

5 種の IADL (表参照) をとりあげ、それぞれについて遂行の可否と遂行者を尋ねた。

【結果】 回答者の 8 割以上が IADL を遂行可能であったが、部屋の掃除では男女とも 2 割、食事の支度では男性の 2 割が自分で遂行できなかった。遂行できる人の多くは、これらの IADL を自分で行っていたが、部屋の掃除では他者に依存している人がやや多かった (表)。

他者の中では、子ども・子どもの配偶者と並んで介護サービスの比重が高く、特に部屋の掃除と日用品の買い物、男性の食事の支度では介護サービスに依存している人が多かった。

【考察】 ひとり暮らしの後期高齢者の中には、IADL を遂行しない／できない人が少数ながら存在し、別居子や介護サービス事業者の支援により生活を維持している実態が示された

表 手段的日常生活動作の可否と遂行者

	日用品の買い物		食事の支度		部屋の掃除		ゴミ出し		預貯金の出入れ	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
できる	82.5	81.1	90.2	75.7	79.7	77.0	87.7	85.1	84.7	85.1
できない	17.5	18.9	9.8	24.3	20.3	23.0	12.3	14.9	15.3	14.9
ほとんど自分	74.9	77.0	81.5	71.6	64.1	52.7	77.0	74.3	80.1	82.4
自分以外	25.1	20.3	18.3	28.4	31.5	36.5	16.7	17.6	19.3	17.6
子・子の配偶者	10.1	5.4	5.7	4.1	5.8	6.8	7.4	5.4	14.2	6.8
兄弟姉妹・親戚	1.1	0.0	0.5	0.0	1.1	1.4	1.4	0.0	1.9	1.4
介護サービス	11.5	13.5	4.6	14.9	21.1	24.3	3.8	10.8	0.3	4.1
その他	2.2	1.4	2.2	1.4	1.4	2.7	3.0	1.4	1.9	4.1
しない	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	1.4	0.3	0.0	0.0	1.4
外食・弁当	—	—	4.9	6.8	—	—	—	—	—	—
不明	0.3	0.0	0.3	1.4	0.5	0.0	0.8	0.0	1.1	0.0
不明	0.0	2.7	0.3	0.0	4.4	10.8	6.3	8.1	0.5	0.0

ひとり暮らし後期高齢者における IADL の自立と遂行

古谷野 亘¹⁾, 澤岡 詩野²⁾, 本田 亜起子³⁾

¹⁾ 聖学院大学 ²⁾ ダイヤ高齢社会研究財団 ³⁾ 元・神奈川県立保健福祉大学

【目的】 本研究の目的は、都市住宅地域のひとり暮らし後期高齢者について手段的日常生活動作（IADL）の遂行の可否と遂行者を調査して、施策検討のための基礎資料を得ることにあった。

IADL の多くは世帯単位のタスクであることから、同居家族がいる場合には家族内の分担を変えることによって問題が解決され、遂行不能が顕在化しないことが多い。しかし、ひとり暮らしの場合には、IADL の遂行不能は、在宅生活の継続を困難にする可能性が高い。そこで、IADL の遂行不能が高率で発生する後期高齢者のうち、ひとり暮らしである人々を対象として、IADL の遂行の可否と遂行者について調査することとした。

【方法】 調査は、2008 年 8～9 月に東京都杉並区内に居住するひとり暮らしの後期高齢者 1,503 人を対象として実施された。調査対象者の選定は住民基本台帳からの無作為抽出によって行い、地域包括支援センターの専門職が対象者宅を訪問した。調査対象者のうち実際のひとり暮らしは 783 人で、うち 440 人（56.2%）から回答を得た。

回答者の 83.2%（366 人）が女性で、平均年齢は女性で 81.4 歳、男性では 82.0 歳であった。要介護・要支援認定を受けている人は、女性で 29.7%、男性では 21.6%であった。

【結果】 回答者の 8 割以上が IADL を遂行可能であったが、部屋の掃除では男女とも 2 割、食事の支度では男性の 2 割が自分で遂行できなかった。遂行できる人の多くは、これらの IADL を自分で行っていたが、部屋の掃除では他者に依存している人がやや多かった。

他者の中では、子ども・子どもの配偶者と並んで介護サービスの比重が高く、特に部屋の掃除と日用品の買い物、男性の食事の支度では介護サービスに依存している人が多かった。また、部屋の掃除をしない人、食事を外食や市販弁当に頼っている人が少数ながら存在した。

【考察】 ひとり暮らしの後期高齢者の中には、IADL を遂行しない／できない人が少数ながら存在し、別居子や介護サービス事業者の支援により生活を維持している実態が明らかになった。比較的多かった不明・無回答の中にも、IADL を遂行しない／できない人が含まれている可能性が高い。

ひとり暮らしの後期高齢者は今後ますます増加すると予想されることから、IADL を遂行しない／できない人々の在宅生活の継続を可能にするためには、生活支援サービスの拡充を図る必要がある。ただし、このことは、ただちに介護保険制度の枠組みのなかで生活支援サービスの拡充を図るべきことを意味するわけではない。介護保険制度の拡充の適否を含めて、高齢期のひとり暮らしを支える仕組みを検討し、確立することが必要である。

